

# カタストロフィの「消費」を超えて

——ポストフクシマ反原発運動と新たな政治主体の登場——

田村あずみ

The Fukushima nuclear disaster provoked Japanese activism that had been stagnant since the 1960s. Yet the post-Fukushima anti-nuclear movement was criticised that it was not a political project but 'consumption of extra-ordinariness', simplifying narratives of catastrophe and utilising them for themselves. This paper, on the contrary, insists that this movement is elaborating a new political subject and ethics. My interview analysis suggests several features of the anti-nuclear protesters; 1) language usage based on emotions to counter rational discourse, 2) acceptance of ambiguity of the self, which therefore led them 3) to search for a better life in a networked assemblage and 4) to value practices rather than universal principles. Although their politics in the street differs from the notion of liberal democracy with a unified rational subject and universalism, their ethics could give some implications of how we might live in the era of risk society.

## 1. はじめに

### 1.1 カタストロフィと社会変革

2011年3月11日のカタストロフィをめぐってなされた議論の一つは、「終わりになき日常は終わったのか」というものだった。宮台真司の著書タイトルにもなった「終わりになき日常を生きる」(1998)という提言は、1995年のオウム真理教の地下鉄サリン事件後になされたものだ。生きづらさを抱える若者の社会への不満が、ハルマゲドンや最終戦争といったカタストロフィの想像力につながった事件の後、宮台が示した処方箋は、あるがままの現実を受け入れてまったりと生きるということだった。

1960年代から70年代の学生運動が廃れたのち、経済成長を遂げる日本社会で、ラディカルな社会変革の希望は語られなくなった。大澤真幸(2008)によれば、現実に対抗する「反現実」への想像力は、1960年代から70年代の「理想」から、その後「虚構」へと変化しながら、具現化の期待は薄れていった。虚構としての反現実の具現化がオウム事件で失敗した後の時代を、大澤は反現実への想像力を失った「不可能性」の時代と表している。

現代の若者が「終わりになき日常」を生きる様子を、社会学者の古市憲寿(2011)は『絶望の国の幸福な若者たち』と表現し、大きな希望を持たずに、友人たちとの小さなコミュニティの中で楽しく生きることを肯定的に描いている。一方で格差が広がった社会において、そうした小さな安定すら持たない人も増えている。非正規労働者の赤木智弘(2007)は、こうした人々にとって、社会変革の希望は「戦争」というカタストロフィであると表現した。

社会変革の希望を失った時代の中でも、なお硬直した日常に満足できず、その流動化を望む

想像力として、「カタストロフィ」は常に存在し続けてきた。では311という出来事は、実際に日本社会に何らかの変化をもたらしたのか。本稿ではこうした問いを、福島原発事故後に盛り上がりを見せた社会運動から分析する。原発事故は、市民が「終わりなき日常」の充足状態から脱し、社会変革に関わる政治的主体となる契機を作ったのか。それとも人々は無力な「非政治的」主体のままなのか。

## 1.2 ポスト311反原発運動の「政治性」を巡って

福島第一原発事故を契機にした反原発の抗議活動は、事故の直後から東電前などで行われた。それが一般市民に広がるきっかけを作ったのは、事故翌月の2011年4月、東京・高円寺で活動するアナキスト集団「素人の乱」が主催した「原発やめろデモ！」だった。参加者は主催者の予想を上回る15000人。以降、渋谷や新宿など繁華街や、原発を抱える地方自治体など、デモは全国で行われるようになり、日常の風景となった。

こうした市民の圧力もあり、定期点検に入った原発の再稼働が困難となって、2012年5月には日本の全原発が停止した。しかし「原発ゼロ」状態のさなかの翌6月末、当時の民主党政権が福井県の大飯原発再稼働を決めたことで、2012年夏に反原発運動は最大の盛り上がりを見せた。とりわけ、東京の反原発グループや個人のネットワークである首都圏反原発連合(反原連)が、2012年3月末から毎週金曜日に続けていた「首相官邸前抗議」には、6月末に主催者発表で20万人が参加した。大飯原発は2013年9月に定期点検で再度停止。2015年1月現在、日本社会は再び稼働原発ゼロの時期を過ごしており、首相官邸前抗議も継続している。

311以降の反原発運動の特徴としては、党派性の薄さ、リーダーの不在、自由意思で集まった市民のネットワーク的な繋がりなどの形態について、すでに五野井郁夫(2012)や小熊英二(2013)らが、2011年のアラブの春やオキュパイ運動と比較しつつ、新しい民主主義の端緒として論じている。運動の盛り上がりによって、官邸前／国会前一带は、市民の政治的主張の場として定着した。市民の直接行動は身近なものとなり、差別や貧困問題、特定秘密保護法に関する抗議も行われるなど、反原発以外のテーマにも広がった。

一方で311後の反原発運動には批判もある。原発に依存する福島の経済構造を分析してきた開沼博は、東京の市民運動が原発を悪とする単純な善悪二元論を採用することで、「『希望』をでっち上げてカタルシスを得ようとする」ものにすぎないと評し、「流行のネタ」として消費した後に忘却するという過去の運動と同じ経緯をたどるだろうと述べる(2012, pp.109-111)。政治学者の鈴木一人(2012)は、大飯原発の立地地域ではない東京の住民の主張の正当性を疑問視する。東京の住民の立場を問う声は、反原発運動の内部からも上がっている。311以前から市民運動に携わってきた植松青児(2012)は、反原発運動とは全原発を止めることと、福島の被災者救済運動の二本柱であるべきだが、東京を中心とした反原発運動は、福島への視点を欠いていると指摘する。福島で発電された電力の消費地だった東京の人々の主張は、結局は強者の論理の上書きになってしまうのだろうか。

こうしたデモを政治運動と捉えない見方もあった。311後の反原発運動を観察した古市憲寿(2011)は、それが退屈な日常の不満のはけ口として機能しているとの印象を示し、社会変革よりは、既存の秩序の中のネタ消費に終わると示唆する。著書で「希望は戦争」と述べた赤木智

弘も、311後の市民運動には否定的だ。2012年に福井県おおい町で展開されたデモについて、赤木（2012）は、外部からやってきた「反原発という正義の衣を纏った人たちが」、地元の迷惑を顧みず「単なるノリでデモを行なって」おり、「参加者が一方的に楽しむためのデモである」としか思えない」とする。また赤木は反原発派が唱える「お金より命」などのスローガンは、自らの生活の安定が保証された既得権益層の言語であるとも述べる（Twitter, @T\_akagi, 2012年7月10日、16日など）。

濃淡はあれ、批判に共通するのは、何のリスクも負わない安全な場所にいる「マジョリティ」の人々が、原発事故というカタストロフィを自分の都合のよいように解釈し、社会運動を利用しているのではないか、そのため運動は一過性のブームとして「消費」され、社会を変える政治的な力にならない（あるいはならなかった）のではないかという指摘だ。311というカタストロフィは言語を絶する体験だった、にもかかわらず、その意味の空白に向き合うことなく、多くの人々はメディアが提供するありふれた物語で空白を埋めてしまった——作家の辺見庸（2012）は、そのように失望を表している。実際、2012年夏の反原発運動の高揚にもかかわらず、その冬の衆院選と翌2013年7月の参院選は原発推進の自民党勝利に終わった。311後の反原発運動、そして社会運動一般は社会を変えることできるのか。その評価は知識人の間でも分かれている。

### 1.3 研究テーマと調査方法

筆者は、311後の反原発運動は全盛期より縮小したものの、事故前よりは遥かに大きな運動が四年近くも継続していることに注目する。デモの継続的参加者の多くは、自らを事故以前の「ノンポリ層」に位置付けており、カタストロフィを機に政治参加を始めた人々だ。彼らにとって福島原発事故がどんな意味を持ち、それがどのようにデモ参加の継続的動機に繋がっているのかを検討することで、彼らの実践が一部の知識人の示唆する「非日常体験という『商品』の購入＝消費」なのか、それとも新しい政治の試みなのか、という疑問に向き合うことができるだろう。そのため本研究は、東京で行われたデモや抗議活動においてインタビュー調査を行い、デモ参加者の動機、アイデンティティ、倫理などを考察した。対象はデモや首相官邸前抗議の主催者・スタッフ（1～4時間程度）と、おもに官邸前抗議の参加者（10～30分程度）らで、現在までに約百人に実施している。

フィールドワークは三期にわたる。第一期は震災から一年後の2012年3月から5月。官邸前抗議が始まった直後であり、2012年5月には全国すべての原発が停止した。直後の6～8月にかけて反原発運動が高揚し、官邸前抗議には数万から20万人が参加した。第二期フィールドワークはこの高揚の直後の2012年11月から翌2013年1月に行われたが、この時期は衆議院議員選挙の時期にも重なった。第三期は震災から3年に重なる2014年2月から実施されている。

調査から見えてきたのは、カタストロフィをありふれたナラティブに仕立て上げ、自らの都合よく利用するという非政治的「消費」論とは逆に、自らのアイデンティティを揺るがす「言語の喪失体験」に誠実に向き合うデモ参加者の姿だった。このことから筆者は、311後の反原発運動は、新しい政治実践のひとつであると考え、本稿後半でその思想を既存の政治哲学と比較する。その上で、311後の反原発運動は、既存のリベラル民主主義の言語や枠組みの限界を問い

直し、感情や私的体験に基づいて政治の再構築を図る試みであり、政治的無力感が蔓延する現代社会の新しい主体を考える上で、ひとつの重要な示唆になるのではないかと論じる。

## 2. 311 後の反原発運動・フィールドワーク分析

### 2.1 新しい政治主体と言語

主に第一期のフィールドワークにおいて、デモ参加者や主催者は、参加理由として、政府や東電の対応に対する怒りや被曝への不安を上げた。しかし、こうした「被害者意識」とともに、もう一つ共通していたのは「後悔」の念である。

日本の経済成長の間に、原発の恩恵にあずかっていた。このような事態になって初めてその危険性を認識した、その反省として参加した（60代男性、デモ参加者、2012年3月11日）。

短期的には、(政府や東電に)嘘をつかれたことに対する怒りがあった。でも怒ってもしょうがない。子どもたちに申し訳ない。もう取り返しがつかない。情けないの一言。自分も東電であり、経産省であり、同罪だ（30代男性、デモ主催者、2012年4月5日）。

ここに滲むのは、自分たちの無知や無関心が原発建設を許してきた、そしてこうした悲劇の芽を知らぬうちに育てていたのだ、という罪の意識だ。福島第一原発で発電していたのは、首都圏が消費する電力だったため、東京の参加者にはこのような意識が強いのかも知れない。

脱原発デモ主催者のひとり、中村由美は、311とその後の運動を通じて「わたしたちは社会のお客さんであってはいけないと気付いた」と話している（インタビュー、2012年3月15日）。高度な専門知識が必要となる原発政策について、これまで市民は政治家や科学者に判断を任せてきた。しかし事故によって彼らが気付いたのは、自分たちは社会と繋がっていて、誰も観察者にはなれない、ということだった。全員が社会の当事者である限り、市民は市民の言葉で声を上げなければならない。運動はその実践として存在している。

初期の反原発運動を盛り上げた「素人の乱」のデモに参加した作家の雨宮処凛は、彼らが呼び掛けに使用した「危ねえ」「恐ろしい」という率直な感情が、参加のハードルを下げたと述べている（インタビュー、2012年3月20日）。他にも多数の参加者が、このデモは自分たちの思いを表現する契機となったと振り返っている。感情は市民にとって重要な政治的言語になっていた。それは専門家の科学的言語とも、政治家の広域な視野を持った言語とも異なるが、流動的な現代社会に必要な、もう一つの瞬発力を持った政治言語ではないか。

しかしこうした市民の言語こそ、知識人が反原発運動に不信を持つ一因でもある。哲学者の柄谷行人が「デモのある社会」を称賛する一方<sup>1)</sup>で、開沼（2012）は、インターネットで支持を広げた愛国・排外主義的デモを引き合いに、『社会運動がある社会』がそれほど『いいもの』なのかと問いかける。2013年の参院選後、思想家の東浩紀も、ネットを通じて高揚した反原発運動は一過性のものだと指摘、こうした「左翼的ポピュリズム」からは「なにもでてこない」（Twitter, @hazuma, 2013年7月14日）と、感情の発露としてのデモの弊害を指摘している。<sup>2)</sup>

さらに反原発派の一部にみられる「過剰な」放射線忌避への批判，そしてその忌避が被災地・福島への「差別」になりかねないという批判は，反原発運動の内部でも聞かれる。政府や科学者への疑念はどこまで合理的で，どこから「妄想」なのか。感情のどこまでが政治言語になるのか，怒りはよくて，恐怖や憎悪は駄目なのか，それとも「正しい恐怖や憎悪」があるのか。こうした線引きは困難だ。

また代替案の提案がないことも，感情に根ざした政治言語の欠点とされた。たとえば経済学者の池田信夫（2012）は，反原発デモ参加者が求める「全原発の即時停止」は，日本をより貧しくする「愚者」の主張と切り捨てる。しかし，高度の専門性を有する原発問題において，市民の提案が専門家と同等の合理性を持つことは困難だ。311がデモ参加者にもたらしたのは，原発政策を政府と科学者任せにし，自らが感じていた素朴な危機感を表明しなかったことへの後悔だった。社会関係が複雑にからみあい，物事の因果関係が特定しにくくなった現代社会で，そもそも市民はどのような立場で政治に関わることができるのか。

ウルリヒ・ベックは，市民の科学技術に対する批判は，無知に起因するのではなく，科学が提示する合理性そのものが機能不全になっていることの表れだと指摘とする（Beck, 1992）。近代の科学技術の発展がもたらす影響は甚大かつ複雑なため，完全な「科学的」予測は困難である。池田が提示するような「経済的安定と原発ゼロ，どちらが望ましい社会か」という問いは，リスク計算で論理的な解を示せない。科学的知見は，選択をおこなう際の準拠にはなるが，その場合にも，それを採用する社会の価値観との一致（ベックいわく社会的合理性）が要求される。

リスク予測の不確実性や，社会的価値観を考慮しない専門家の判断は，人々の生を脅かしかねないと原発事故で明らかになった。利害計算が可能な部分のみを計算して合理性を主張するのではなく，計算不能な要素，たとえば遠い未来への影響も意思決定に反映するためには，新たな政治言語が必要とされている。感情から発せられた「原発はいらない」という瞬発力に飛んだ言語は，政治に多面性をもたらすのではないか。メキシコ先住民の自治をめぐるサパティスタ運動を研究するホロウェイは，「ノー」と言うことは創造的な行為であると述べる。なぜならそれは自律への一歩であり，代替されるべきひとつの「イエス」を示せないとしても，行動を通じて幾つもの「イエス」を実践することに繋がるからだ（Holloway, 2010, p.218）。

感情言語を政治から排除するよりも，弊害を考慮した上で，うまく活用することができるのではないか。近年，政治における感情や情動（affect/emotion）の重要性は見直され始めている。市民の集団的行動は，最初から明確な政治的要求や社会構想をもつとは限らない。たとえばエイズ禍に対する米国の直接行動グループ「ACT UP」の運動は，米社会でそれまで忌避され，形に現れていなかった「怒り」の感情を可視化し，正当化し，増強したことで成功したと分析されている（Gould, 2004）。

さらに感情によって生まれる政治的行動は，必ずしも一過性のものとは限らない。怒りや驚きなど，事象や情報から派生する感情は短期間しか持続しないのに対し，愛情や同情など，人との関係に基づく感情は長続きするとの指摘もある（Goodwin et al., 2001）。原発事故に怒りを感じ，路上抗議に参加するようになった市民は，そこでの他者との出会いによって別の多様な感情も獲得し，関与を深めていったと考えることができる。

ある参加者は官邸前抗議のスピーチで，日頃「つつい原発問題を忘れてしまっている」が，

抗議の場で福島の人々の話を聞くと「被災されている人の痛み、苦しみ、原発がどんな大きな問題だったか、心にしみてくる」と語った（国会前スピーチエリア，2014年5月9日）。多くの参加者は、デモに参加することで原発に関する知識を深め、次の行動のモチベーションを得ているとも話す。持続的な感情を生み出すのは「身体性」なのかもしれない。デモの集団的な高揚が、個人の思想から身体性を奪うという知識人の懸念は重要だとしても、個人の思想に身体性を回復させるのも、また同じデモという場であることを見逃してはならない。

最新の社会運動を研究するマクドナルドは、こうした運動で用いられる言語は、合理的利益に基づく要求ではなく、行動から生まれた言語であると指摘する（McDonald, 2006）。その上で彼は、感情と理性、あるいは身体と精神を分離する二元論に疑念を呈し、身体が経験を通じて知覚を形成すると述べる（McDonald, 2006）。近年の社会運動については、SNS（Social Networking Service）を使った動員と同時に、物理的な場を共有することで得られる偶発的で身体的な繋がりを重視することも知られている（Hardt and Negri, 2012）。オキュパイ運動などの海外の社会運動で常設的に存在した「広場」と比較すれば、日本の官邸前抗議は時間が限定され、対話も少ないが、参加そのものが学びや刺激となり、官邸前抗議が三年近く継続していることは特筆されるべきだろう。

## 2.2 自己認識と自律の概念

とはいえ、自らの経験から生じた言語には危険性も存在する。感情の持続性の問題とともに指摘されているのは、その語りのなかに他者（弱者）への想像力はどのように含まれるのかということだった。

実は筆者の調査において、デモの場で他者への「義務」という言葉はあまり聞かれなかった。参加者の多くは「自分の満足のためにやる」と表現する。この表現は誤解を生みやすい。それこそ古市の議論に見られるように、社会運動という非日常で日々の不満を解消し、いつもの日常に帰ってゆく——つまり自身の安定的領土を守りながら、都合のよい時だけ運動を利用して——という「自己満足」批判にも繋がるからだ。

しかし継続的な官邸前抗議の参加者やスタッフの声を聞くと、彼らの個人主義的な主張に含まれる「自己」の概念は独特だ。

なぜ自分がここにいるのか、と考える。自己満足というとマイナスのイメージがあるが、自分がここに来たいから来ている。この場の一員としてわたしがここにいることは、自分にとっても心地よい。（自分が被災地でやっている）ボランティアと同じ部分がある。瓦礫処理など、誰もいないところでの活動もあり、現地の人とのふれあいがあるわけではない。寒いし疲れるのに…充実している。満たされるのかな（インタビュー、官邸前抗議参加者、60代女性、2014年2月21日）。

官邸前抗議の参加者は、よく自分自身を群衆の中の「頭数」、大河の「一滴」、あるいはことわざから、山をにぎわす「枯れ木」などと表現する。自らが名前のない存在として、社会を変える流れの中に身を置いていると認識しているのだ。自己の存在に誰の承認も求めず、社会

を変える名もない一存在になることに満足するという感覚は、自己を個体として「完成」することへの満足というより、自己を流れの中に「解体」することに満足を感じているようにすら感じられる。ではこの解体された自己とは、個性を集団に埋没させた自己なのか。

反原連のミサオ・レッドウルフもまた、運動は「自分のため」にやっていると言っているが、その言葉には自律と他律の両方が含まれている。彼女はまず、「東京」の反原発運動が強者のひとりよがりの論理だという批判には、こう反論する。

東京が福島に寄り添ってないと言う人がいるが、そういう人こそ（東京と福島を分けている時点で）自分ごとじゃないということ（インタビュー、2014年4月16日）。

この言葉から、彼女が「対象である他者の苦痛を認識して、他者のために行動する」と、「他者の苦痛と自分の苦痛が一体化した状況下で、自分のために行動する」ことを区別しているように思われる。さらに「自分のため」の行動の意味については、

システムに住まないといけない自分の問題として（運動を）やっている。こんなやつらに支配されたくない。[...] 新自由主義者に自分の人生を左右されたくない(2014年4月16日)。

一方でミサオは、本業のイラストレーターを休業して運動に専念する自身については、一人の芸術家として名が残るより、「いい世の中にするための礎の一つになること」を自分の「魂が欲しているのだと気付いた」と語る（2014年4月16日）。彼らに共通する「自分の満足」とは、他者との関係性の中で自分の生がある程度制約されることを受け入れたうえで、なお自分の価値観で働きかけ、自分の能力を発揮し、他者と共に生きることから生じるものなのかもしれない。

### 2.3 社会関与の倫理

現代社会の新しい主体について、ハートとネグリは「マルチチュード (multitude)」という概念を提示している。彼らがここでマルチチュードと対比しているのは「人民 (people)」と「大衆 (mass)」である (Hardt & Negri, 2004)。人民とは権力によってその性質を定義された単色で統一的な集合体、逆に大衆とは多様だが孤立したバラバラの存在だ。一方でマルチチュードは「一群の特異性からなる」流動的な集合アイデンティティとして定義されている (Hardt & Negri, 2004)。多様な経験をもとにしながらも、一つの運動の「流れ」にあることに満足を感じるデモ参加者は、この「一群の特異性からなる」政治主体に該当するかもしれない。

一方でマルチチュード概念は、その形成過程について、ハートとネグリが著書で殆ど触れていないことが批判されている (Day, 2005; Newman, 2007)。新しい抵抗主体であるマルチチュードは、いかにして形成されるのか。多様なアイデンティティを持つ人々が、どう連帯するのか。多様な 311 以後のデモ参加者が、どのように他者と関係しようとしているか、その倫理を見てゆけば、ヒントがあるかもしれない。

先に述べたとおり、彼らは痛みをもつ他者の「ため」に行動するという「他者 (弱者) への義務」を語らない。すると疑問になるのは、デモ参加者にとって社会関与の責任とは何を意味

するのか、あるいは責任という概念は存在しないのか、ということだ。

原発だけでなく311以前から貧困問題でも活動する作家の雨宮処凛は、自分が運動にかかわり続けるモチベーションを、1999年に参加したイラクへの視察の経験から説明する。「野次馬根性」で視察に参加した雨宮は、劣化ウラン弾の被害を知ってしまったことにより「いてもたってもいられなくなった」と振り返り、こう語る。

（たとえ知ってしまったも）考えないようにすれば、そうやって生きて行くこともできる。なかったことにもできる。けれどそういう自分が怖い。無関心になれるからこそ、無関心にならないようにしている（雨宮、インタビュー、2012年3月20日）。

無関心になることへの恐怖と行動との関係は、311後の反原発デモ参加者らにも見られる。震災から3年後、反原発デモに参加した20代の女性は、その理由を、放っておけば日常の中で311を忘れてしまう「自分への戒め」と語った（インタビュー、2014年3月9日）。また反原発デモや抗議行動のスタッフを務める那波かおりは、311からの行動の軌跡をこう振り返る。

（事故の）爆発を見たときから、自分がこれに加担してきたのだと気付いた。東海村で起きた臨界事故にも、湾岸戦争にもショックを受けたのに、忘れていった。思い出しても、日々に埋もれ、合理化した。爆発を見たとき、これ（忘却）を二度とやっちゃだめだと。生活や日々の忙しさを理由に今の気持ちを埋もれさせたら、自分のプライドを持ってなくなる。その後、ツイッターを始めた。世の中に向けて本名で発信すれば、それに従って自分も考えていく責任が生じるだろうと（インタビュー、2012年12月17日）。

放っておけば忘れてしまうからこそ、自らの身体を他者のいる場に運び、自らに「感じ続ける」機会を与えようとする。ジャーナリストの内田誠は、官邸前抗議とは「記帳」行為に似ていると語る。「自分の嫌悪から生じた強い意思に責任を持つ」<sup>3)</sup>ため、毎週官邸前に身体を運び、その思いを行動によって刻み込むのだと（トークイベント、2012年12月22日）。

英国の哲学者クリッチリーは、レヴィナスの思想を借りながら、倫理的な主体はトラウマ的な経験から生まれると述べる（Critchley, 2007）。外部から突然やってきた理解不能の出来事を受け止めたとき、自分のアイデンティティがゆらぐ。その混乱の中で、自らの応答が決して完全なものになりえないと知りつつ、なお他者に応答を続けるという「Infinite responsibility（無限の責任）」を受け入れるのが倫理的な主体である、というのだ。

原発事故によって、人々は、自分たちが当たり前に入れてきた言説、当たり前前の日常の延長にカサロトフィがあったことに気付いた。そのショックは自己の基盤を揺るがしたのではない。わたしたちは無関心だったり怠惰だったり、みな不完全だからこそ、その不完全な自己を他者と反響させあいながら、集合体としてよりよい生を探ろうと考えるのではないか。

ここで見られる倫理とは、自分より弱い他者のため行動する義務というよりは、最低限「忘れられない」ということ、見知らぬ他者に開き続けることなのだろう。わたしたちは社会から自らを切り離れた中立な観察者にはなれない。だからこそ自らの立場から発言を行う。しかしわた



私たちは正しいやり方を知らない。だからこそ他者と繋がり、他者と共に進む方向を探ってゆく。そして、その生きざまを自分の誇りや満足として語る<sup>4)</sup>。311後の路上の政治とは、こうした新しい倫理に基づく、新しい政治の可能性を示しているといえないだろうか。

### 3. ポスト 311 反原発運動にみる政治哲学

#### 3.1 政治的主体の形成

これまで述べてきた新しい反原発運動の特徴——政治言語としての感情の重視、目的における実践主義、脱主体的な個人主義に基づく倫理など——は、既存の政治哲学から見れば異質なものだ。そしてこのなじみのなさこそ、反原発運動が一部の知識人に利己主義的なカタストロフィの消費だと誤解される要因なのではないか。

ポスト 311 の反原発運動で見た「流れの中の自己」という考えは、これまでのリベラル・デモクラシーが想定する自律的主体や、それをもとに構成する連帯（集合的アイデンティティ）の概念とは異なる。リベラリズムが政治主体として想定するのは、自己の利益を知っていて、それを合理的に追求する個人だ。ここでの課題は、個々人が自己利益の追求のために他者を犠牲にしないようなシステム、つまり個人の利益と公共の利益のバランスをとり、公正で秩序立った社会を可能にする原理の模索だ。

この秩序の正当性について、たとえばロールズは、人々が合意した正義の原理にかなっているかで判断をする。ロールズの卓越した点は、多様な価値観を持った市民が合意できる条件を仮定の原初状態に求め、個々のアイデンティティを「無知のヴェール」で覆い隠すことで、合理的な議論を保障したことだろう（Rawls, 1999）。ロールズの正義論が、原初状態という思考実験で合意しうる原理を正当とする一方、ハバーマスは、実際に多様なアイデンティティを持った市民が、理想的な条件下で行う熟議が、事後的に作りだす合意に正当性があると考え（Habermas, 1990）。ハバーマスがこの、いわゆる「コミュニケーション的理性」の実践の場と想定する公共圏の理念は、社会運動の議論でもよく聞かれる。官邸前抗議に「広場」の機能が足りないとの批判も、この熟議や合意のプロセスがないことを指摘している。

これらの政治理論は、利益を主張する一貫した主体と、彼らによる「合意」を前提とするものだ。しかしこうしたリベラリズムの主体像については、まず共同体主義者が批判している。共同体主義者は、政治的利益が歴史的プロセスや社会関係の中で生まれると考えるからだ。リベラリズム擁護者のなかでも、たとえばムフは一貫した主体像に否定的だ。しかし彼女は、共同体主義者のほうの主張も、「合理的主体」を「共同体倫理に縛りつけられた主体」に置き換えたただけで、同じ間違いを犯していると考える。ポスト構造主義の観点を取り入れたムフが想定するのは、関係性の中で常に変化する多様な政治的主体だ。そのため彼女は、後で述べるように「合意」の追求を放棄するのである（Mouffe, 2005）。

従来のリベラリズムが想定してきた合理的で統一的な主体に対する、こうした懐疑は重要だ。現代社会では、多様な利害を持った政治的主体がどう協調し、公正な秩序を実現するか以前に、人々が自分や他者の利益をどう特定するのか、つまり「政治的主体の形成」が問われる。反原発運動参加者の多くは 311 以前のノンポリ層であり、既存の秩序の中で自分の生活に満足して

きた。その生活が実は他者の生活を犠牲にしており、自分の不利益にすら繋がったことを知ったのは事故の後だ。このように現在、日本社会の市民の多数は、不当な権力によって権利を直接的に否定された存在というより、メディアなどに上書きされたひとつの価値観にそって、自らの生のあり方を自主的に形作ってしまう存在だ。彼らは社会の複雑性と科学技術の不確実性が生みだした「リスク社会」の中で、知らぬうちに自分の生の可能性を自ら狭めるような「生権力」下の主体として生活している。

311 というカタストロフィは、こうした複雑な権力関係に絡み取られた生の脆さを露呈した。その中で戸惑いつつ路上で声を上げ始め、他者とともに「よりよい生」を手探りする反原発運動とは、政治的主体の形成の場そのものだ。こうした場は、個々人の利害を調整するという既存の政治概念では把握しきれない。リベラリズムは利益が最初から自己に内在しているものと考え、共同体主義は、利益を形作る価値観は自己の外にあると主張する。だがどちらも政治主体の本質は「すでにある」ものとされ、主体の形成という概念はない。しかし自己の利益が自分の中で完結しえないとき、政治には主体間の利益調整よりも先に、「わたしたちはどのように生きたいのか」の模索が必要になる。だからこそ、ある若い官邸前抗議の参加者は反原発運動を「原始的な政治運動」と表現し（インタビュー、10代男性、2012年12月21日）、また彼を含めた多くの参加者が、原発問題は「右派・左派の枠を超えたいのちの問題」と語っているのだ。

### 3.2 合意の困難

ところで、自己の利益も定かでない脱構築的主体の概念を受け入れるとしても、この主体がどうやって政治に必要な集合的アイデンティティを構成するかを考えなくてはならない。それは、断片化した無力な「非」政治的主体の群れになる恐れはないのか。

合理的・統一的主体に否定的なニューマンは、新たな共同性の基盤として「Unstable Universalities (不安定な普遍性)」という概念を提示する (Newman, 2007)。ニューマンはこれを、ハバーマスとリオタールの中間的思想と位置付けている。ハバーマスは理性を合意の前提として重視しすぎる一方、リオタールのように多様性を重視するポストモダニズムでは、コミュニケーションが成立せず合意に至ることができない。その中間的な彼の理論は次のように要約されるだろう。——普遍的概念（正義の概念など）に皆が合意することは必要だが、合意のための合理的主体や決まったプロセスは必要ない。

ニューマンが例に挙げるのは反（オルター）グローバリズム運動<sup>5)</sup> (AGM) だ。ニューマンによれば、こうした運動では、個別事情を背景に各地で散発的に盛り上がるアクションが互いに反響しあって、共通テーマを映し出している。だからこそニューマンは、こうした反グローバリズム運動は、いまや次の段階を必要としていると説く。反新自由主義を普遍的テーマに掲げた恒常的政治プロジェクトにすべきだというのだ (Newman, 2007)。

これに似た意見は日本でも見られる。反原発、反貧困や反差別などのシングルイシューの運動は短期間で終わりかねず、統一テーマが必要だとの主張は以前からあった。2014年2月の東京都知事選の投票行動で見られた脱原発派の分裂も、統一テーマの必要性の議論につながった。この選挙では有力な脱原発候補として、反貧困を掲げる市民派候補の宇都宮健児と、国政にインパクトを持つ元首相の細川護熙が立候補。細川が新自由主義的改革を進めた小泉純一郎元首

相とともに活動したことから、「新自由主義者と手を組む反原発派」の是非が運動参加者の中で論じられ、シングルイシュー運動の弊害も指摘された。

個別のアイデンティティやテーマから生じた運動は、やがて統一テーマを掲げた恒常的な政治プロジェクトへと成熟するのか。それはどういったプロジェクトだろうか。2011年に世界的に広がったオキュパイ運動などの「広場型」運動は、「われわれは99%だ」という多数性の強調や、全体集会の決定を重視するなど、2000年代前半のAGM運動に比べ、意思の統一性を求める傾向があるとの報告もある（Gerbaudo, 2014）。しかし、これをシングルイシュー運動が次の段階に「成熟した」とは一概に言いきれない。統一性を重視する「広場型」運動は、個々の差異を抑制し運動の単一化に向かうとの批判もある（Gerbaudo, 2014）。

ただこうした議論を、「統一性か、多様性か」「制度化に向けた合意か、運動の拡散・変容か」という運動論の二項対立で捉える必要はないだろう。近年のラディカル・デモクラシー論は、両者の長所を生かすような、折衷的システムを構想する。たとえば前述のニューマンは、雑多で流動的なものが、その特徴を残したまま恒常化・普遍化するという政治を理想に挙げた。

一方でムフは、普遍的合意を求めることは民主主義の理念に背くとする。それは差異を妥協させ、かえって敵対性を生みだすと考えるからだ（Mouffe, 2005）。ムフは、権力を多元化していくことで一極集中の覇権に抗うことができるとし、一元的合意に至る熟議の代わりに、異質なヘゲモニーの論争（闘技）に希望を見出す。市民の怒りをぶつけ、政府に圧力をかけることを目的にする官邸前抗議は、ヘゲモニーを多元化する闘技的な政治と近いかもしれない。ただしムフの議論も、闘技を政治の基礎にするというルールに合意することは前提になっている。

つまり正当な手続きを定め、その結果としての多元性を許容するムフも、いかなる正当的手続きも前提としない代わりに、個別の主張の集合から普遍性が生まれると信じるニューマンも、正義になかった普遍的秩序が存在する（現れる）という前提は崩していないように見える。しかし原発事故が問うのは、普遍的で正当な社会原理を特定することは可能なのか、ということでもある。たとえば未来世代の意思は確認できない。それどころか現代世代の利益もまた、長期的視野でみれば不確かで非一貫的だ。「われわれが合意した何らかの政体」に意思決定の正当性を置くだけの政治では、現代社会の複雑性に対処できないのではないのか。

つまり必要なのは、より多元的な政治的秩序というより、政治そのものの多元化ではないか。恒常的秩序をより柔軟なものにしようとするムフらのラディカル・デモクラシー構想は魅力的だが、そうした秩序化を疑う差異化の流れも同時に保障されるような政治を想像できないだろうか。「来たるべきデモクラシー」は、一つの正当な政治原理としてではなく、より雑多な政治的試みの渦のようなものとして描くことはできないのか。

### 3.3 ネットワーク的倫理

ではメジャー化・秩序化の流れと逆に、差異化の流れを保障する政治とは、どんなものか。前項で統一性を尊重する「広場型運動」と対比されたAGMは、ポスト（ネオ）アナキズム思想の影響がより強い運動である。日本の福島原発事故後、いち早く反原発運動を展開した「素人の乱」も、この系譜の運動だった。

ポスト構造主義の影響を受けた「ポスト」アナキズムが「古典的」アナキズムと比較される

のは、おもに主体の認識の違いによる。ポストアナキズムの思想家であるニューマンやコール (Newman, 2001; Call, 2002) は古典的アナキズムを、人間とは本質的に道徳的で理性的であるとするバクーニンや、人間は本能的に相互協力的であると考えクロボトキンのように、何らかの人間の「本質」を抑圧的な国家権力から解放することが、よりよい社会をもたらすと考える思想と捉える。

一方で、ポスト構造主義は本質主義への懐疑から出発しており、この流れを汲むポストアナキズムも、解放されるべき人間の「本質」は想定しない。さらに「国家から」の解放という想定も容易に受け入れない。ポストアナキズムの想定するのは、自己の外側から自己を抑圧する権力よりも、むしろ自己が内在化してしまった権力関係である (Call, 2002)。

1950～70年代に活動したフランスのシチュアシオニストは、こうした権力から個人の「真の欲望」を解放することを政治的目標にしていた (Vaneigem, 1983)。しかしニューマンが指摘するように、1960年代の運動が「解放」した欲望こそ資本主義を加速させた (Newman, 2007) のであり、現代社会では「真の」欲望を抑圧する絶対的権力があるというよりは、自らの生を否定する方向に流れてゆく個人の欲望があるだけだ。

この「真の欲望」も特定できない脱構築された存在を認め、さらに集合アイデンティティを形成するための共通の物語の復活も期待しないなら、いかなる政治思想が成立するのか。完全に無力な、あるいは一時的な感情に流される「非主体」しか残らないのではないか。そのため、ムフやニューマンの政治思想は、ポスト構造主義を取り入れつつも、最低限の普遍性を置こうとする。ニューマンの思想は、合理的主体も定常的な原理も想定しない点で、ポストアナキズムの系譜に位置づけられる。しかし本人も区別するように、ポストアナキズム思想の多くは、ニューマンのように個別の実践が普遍性に収斂することを重視せず、むしろ個別の実践が偶発的に拡散してゆくことを祝福する傾向にある。

この思考はドゥルーズ＝ガタリのリゾーム (Rhizome) の概念に表れている (Deleuze & Guattari, 1988)。彼らはこれを「始点と終点を持たないネットワーク」とする。一点に収斂する「ツリー状」の連なりと違い、偶発的で部分的な接続の繰り返して、全体像なしに展開する。そのため、このリゾーム的ネットワークにおいて「どこから来たのか」「どこへゆくのか」という問いは無駄である (Deleuze & Guattari, 1988)。これは政治学において「正当な主体は何か」「どんな普遍的概念を目指すか」という問いを無効化すると考えられる。ではリゾーム概念は何を問うか。それは次にいつ何と繋がるか、その繋がりがどのように作用するのかだ。ドゥルーズとガタリは社会の原動力を、自由で自律的な主体の意図よりも集合体の作用から考えている (Patton, 2009)。

ドゥルーズの思想とは「問題を解決するというよりも、問題とともに生きる方法を提示する」 (Williams, 2013) のものであり、「いかに生きるべきか」よりは「いかに生きるか」を問うものである (May, 2005) とされる。そして「正しさ (適切さ)」や「原型」をもとに判断を行う思想ではなく (Williams, 2013)、ドゥルーズ自身は、本質とは「偶発的な出来事」であると述べている (Deleuze, 1994)。

これは311後の反原発デモ参加者が示唆する自己と他者の関係性に似ている。その倫理とは以下のようなものだった。外部から突然やってきた「出来事」を受け止めたとき、自分自身の

信念がゆらぐ。そのような混乱の中で、完全な答えを知らないまま、それでもなお自分は社会の当事者であるという責任を胸に、他者に対し手探りで応答を続ける。ここにリベラリズムが想定する安定、秩序、均衡は存在せず、語られるのは偶発性、混乱と不均衡性から生まれるネットワークである。主体は「出来事」の中で、半ば受動的に作られる関係性に対して能動的なアクションを起こす。デモ参加者の中には、そうした「出来事」に対して自らを開放し続けることを責任と考える人も多かった。これは、欧米の最新の社会運動を研究するデイが「Groundless solidarity（根を持たない連帯）」と呼ぶものにも近い。人々がリゾーム的ネットワークの中で他者との接触から構築する倫理こそ、承認や秩序への統合を基盤とする政治とは別の、新しい政治の可能性を示しているとデイは述べる（Day, 2005）。

### 3.4 反原発運動とプラグマティズム

とはいえ、311後の反原発運動が、前述のようなポストアナキズムの実践である、と宣言するのは語弊がある。311以後の反原発運動の特徴は、左派、右派、アナキスト、政治的な中立層をすべて含んでいる。注目したいのは、むしろこの雑多性だ。

参加者のうちもっとも多いのは、311以前には社会運動に関わったことがなく、自らを政治的に中立と考える層だ。官邸前抗議を主催する反原連も、構成グループのほとんどが、311後に設立されている。もちろん参加者の中には、1960年代の学生運動や、その後のマイノリティ運動などの流れをくむ左派活動家もいる。しかし反原発運動として最大規模の官邸前抗議は、学生運動がイデオロギー対立から過激化し、市民の運動アレルギーを招いたことを教訓に、思想性を問わないシングルイシューの非暴力運動を貫いて支持を集めたこともあり、政治思想的な面では、過去の左翼運動との連続性は薄い。

311後の反原発運動をポストアナキズムの系譜で語る場合は、2011年当時の運動の中心だった「素人の乱」の特徴を重ねていることが多い。祝祭性の強かった「素人の乱」の「原発やめろデモ！」は、エジプトのタハリール広場を意識した「解放区」をデモ後の新宿で実現させ、ミュージシャンや活動家、学者がスピーチする集会も行われた<sup>6)</sup>。

一方で2012年に巨大化した官邸前抗議は、スタイルだけ見ればアナキズムとはほぼ無縁のものだ。政府に反原発政策を実現させるための行動である官邸前抗議は、より多くの人々の参加こそ政府への圧力になると考え、参加のハードルを下げ、秩序を重視している。マジョリティ性に訴えかける抗議スタイルは、反原連に属するグループの中でも、渋谷で反原発デモを行ったTwitNoNukesのスタイルを受け継ぐが、主催者の一人である野間易通（2012）は、このTwitNoNukesが「素人の乱」的なアナキズム——つまり新たな価値の創造の場となるような祝祭的デモ——のアンチテーゼだったと語る。シンプルな怒りを既存の政治システムの中核にぶつける官邸前抗議は、毎週ほとんど同じ形式で単純なコールを繰り返している。

この二つの抗議行動は、統一的なイデオロギー主導の伝統的左翼運動に対する別々の応答であり、その政治の形はまったく異なる。そのため、多様性と創造性を重視する反原発派の中には、官邸前抗議が盛り上がった直後に参加したのみで、以後はコミュニティベースの活動を始めた人も多い。アクティビストの植松青児は、政府に対する市民の「強さ」を強調する官邸前抗議は、力なき人間の声や、言語化不能の思いを拾えないと懸念する（インタビュー、2013年1月3日）。

このため植松は、戦略を駆使する力強い政治運動に対し、「ノイズ」としてのデモや車座集会など、支配的価値の転換をもたらす政治の形を模索する。

ただし、この二つの異なるタイプの運動の参加者には一定数の重複も見られる。反原連ネットワークに属する「脱原発杉並」は、「素人の乱」と同じ東京都杉並区で2012年初頭に結成された。オンライン中継もされる開かれた会議で、店主や起業家、ライターや地元議員ら「有象無象」が次々に突飛な提案をし、周りがある熱意に動かされながら、カラオケカーの登場するユーモラスなデモなどを企画してきた。デモ参加者に対し地元の商店が割引を行う「デモ割」を考案するなど、反原発運動を自分の生活と結びつけ、新たな価値観を模索するスタイルも、元々はコミュニティ運動がベースの「素人の乱」と共通する。

同じ直接抗議でも、このような自治型の運動は、政府に圧力をかけることで、硬直化した議会政治を多元化しようとする官邸前抗議とは異なる。脱原発杉並の会議で、互いに衝突しながら新しいアイデアを生み出す一人ひとりの個性は、官邸前抗議ではひとつの強力な「国民の声」を体現する群衆の「頭数」となり、多様性は失われる。だが脱原発杉並の中には、力強い声と多様な声の運動を区別した上で、両方に参加するメンバーもいる。官邸前抗議のスタッフで、脱原発杉並メンバーでもある中村由美は、反原連が用意する官邸前抗議は「堅い器」、脱原発杉並を「柔らかい器」と表現し、国政に訴えかけるシングルイシュー活動と、杉並のような「生活を見つめなおし、繋がっていくことで地域から変わっていく」運動は両方必要だと述べている（Twitter, Direct Message, 2012年8月6日；インタビュー、2012年11月19日）。官邸前抗議を離れ、別の活動を始めた人々の間でも、官邸前抗議は必要だが、それだけでは社会は変わらないので自分は別の役割を担う、という語りがあることが多い。

311後の反原発運動は、固定的なものと流動的なものを折衷した、民主主義のひとつの範型を提示しているというより、むしろメジャー志向の政治と、そこから逃れるマイナー政治が混淆しながら展開する政治の可能性を示しているのかもしれない。混淆の渦が生んだ作用は、既存の政治制度をより民主化しようとする流れも作るが、一方で新しい価値観を作り出そうともしている。311以後の社会運動の特徴は、こうした多様な「器」としての運動の並列と、適宜の判断で器を選んで加わり、その時々が必要とされる個人の要素（ときに頭数としての身体、ときに個人の能力）を提供できる柔軟な個人にある。

この柔軟さは、官邸前抗議を主催する反原連にも見られる。反原連は2012年6月末、参加者が20万人のピークに達した際に、警察と衝突して官邸に突入しようとした一部参加者に、「大切なのは抗議の継続」と解散を呼び掛けたことで、権力に妥協したと批判を浴びた。しかし何の変哲もない首相官邸前の路上を抗議の場にした最初の逸脱がなければ、官邸前抗議そのものが存在しなかったことを考えれば、反原連を一概に「権力に従順」とは捉えられない。反原連の野間易通（2012）は、警察を「闘うべき権力」とは見なしていないと述べる。この考え方は、権力が分散化した時代において、必要な時は国家と協力し、必要な時にそれをかわすという、デイが近年の世界の社会運動の潮流に見る実践と共通している（Day, 2005）。

野間（2012）によれば、反原連はデモという場を用意する「実務集団」であり、個々の思想を話しあうことはない。こうした姿勢に近いのは、自分の思想の一貫性を脇に置いて、必要な時期に効果的な行動をとるプラグマティズム（実用主義）だろう。311後の反原発運動内で時

折見られる対立は、イデオロギー対立というよりは、統一的イデオロギーの有無を巡る対立であり、デイの言葉を借りるなら「反権力の一貫したプロジェクトを作ろうとする欲望と、それぞれの理由に基づく非一貫的な闘いを認める欲望の間の対立」（Day, 2005, p.152）かもしれない。

普遍的な正当性ではなく個々人が実用的と判断したものに価値基準を置くプラグマティズムでは、知識は絶対的基準を提供するというより、実践のための有用な情報（道具）の一つと考えられる（Jones, 2008）。自らの行動原理を「普遍的」正義に求めようとすれば、その正当性を判断する超越者の審判か、参加者の見解の一致が前提となる。一方でプラグマティストは、ある行動がよりよい社会を実現するために効果的である、と自分が判断すれば行動する。独善的にも思えるが、実はよりよい社会の構想も、自分の行動が効果的か否かも、一貫した基準があるわけではなく、常に個別事例ごとに自分と外部（他者や周辺環境）をすり合わせることでしか把握できない。人々の価値観や合理性の判断基準が、原発事故によって変わったように。自分の主張は常に不確かなものであると自覚した上で、なおニヒリズムに陥らず、他者と共に行動しながら自分なりの正しさを追求する試みが、311後の反原発運動にみられる実践主義や、他者に開かれたネットワーク的倫理なのではないか。

#### 4. おわりに

311後の反原発運動の中で生まれつつある新しい政治主体は、その新しさゆえに「政治」的と認識されず、利己主義的な消費にすぎないと言われたり、一時的なブームで終わったと評価されたりする。国政選挙が自民党の大勝に終わるなど、いわゆる議会政治に直接的な結果を残していないことも低評価の一因である。しかし参加者たちにとって、運動は脱原発を実現するまで続くものあり、効果的な戦略を考えては実行し、忘れないための責任を刻みながら、自己と周りが共に変化してゆくプロセスとして認識されている。

彼らは、アイデンティティに即した要求を行う一貫した存在というより、むしろある一つの出来事を経験することで「外部」に開かれる存在だった。そして人々は達成されるべき普遍的秩序の形を問うより先に、今あるものがどのように変化するかという実践的作用を考えている。「開かれてしまった」個人は、正しいやり方や行くべき場所について、共通の合意があるわけではない。しかし自分の信念をもとに踏み出した一歩先で、自らの価値観が他者の価値観とぶつかる接点こそが、唯一の確実な基点となる。そこで生まれた自己の感情によって、次の方向性や新たな行動への動機が生まれている。

このときの自己と他者の関係は、運動の消費という批判がイメージするような、他者を犠牲にして自己を満足させることでもなければ、従来の道徳規範が前提とするような、他者の「ため」の奉仕でもない。それは、自己の領土は存在するけれど、そこに他者を巻き込むことでしか自己を生きられないということを受け入れ、その集合的な生をどう生きうるか、実践によって探り続ける倫理だろう。だからこそ、311以後の新しい政治は運動の形式を見るだけではわからない。その新しさは、こうした倫理をもって、柔軟に場所と姿を変えながら、よりよい生を実現しようとする個人の実践にあるからだ。

## 注

- 1) 柄谷は2011年9月の「原発やめろデモ！」に参加した際のスピーチで、デモをすることによって、「人がデモをする社会に変わる」とその意義を述べた。
- 2) 本稿執筆後の2014年9月、東は311後の市民運動への評価を変え、在日韓国人にヘイトスピーチを繰り返す排外主義団体に対し、市民が行うカウンター行動に支持を表明した。同月のツイート (@ hazuma, 2014年9月6日, 26日など) で、東は不公正を実際に目の当たりにした個人が、怒りや共感に基づいて行動することを肯定している。ただし反原発運動など、大規模な運動の高揚の中で、個人の主張が自身の経験から離れて形骸化し、言葉が独り歩きすることへの懸念は維持している。
- 3) トークイベント「討論・新政権にどう対峙するか」(2012年12月22日, 東京都千代田区)での発言。市民グループ「みんなで決めよう『原発』国民投票」が主催した。
- 4) 福島事故以降の反原発運動を通じた市民の社会参画と、個々人がそれに見出す「生の意味」についての詳細分析は筆者の別論文 (Tamura, 2014) 参照。
- 5) 自治を求めて1994年にメキシコで蜂起したサバティスタの運動や、それ喚起にされた各地の抵抗運動、1999年のシアトルWTO閣僚会議以降に展開するサミットに対する抗議行動、ダボス会議に対抗して開かれる世界社会フォーラムの試みなど、新自由主義的価値観に対する「もう一つの世界 Another world/ Other worlds」を実現しようという一連の社会運動を指す。
- 6) 「原発やめろデモ！」 <http://611shinjuku.tumblr.com/> より

## 引用文献

- Beck, U. (1992). *Risk Society: Towards a New Modernity*. London: Sage.
- Call, L. (2002). *Postmodern Anarchism*. London: Lexington Books.
- Critchley, S. (2007). *Infinitely Demanding: Ethics of Commitment, Politics of Resistance*. London: Verso.
- Day, R. F. (2005). *Gramsci is Dead: Anarchist Currents in the Newest Social Movements*. London: Pluto Press
- Deleuze, G. (1994). *Difference and Repetition*. London: Athlone.
- Deleuze, G. and Guattari, F. (1988). *A Thousand Plateaus: Capitalism and Schizophrenia*. London: Continuum.
- Gerbaudo, P. (2014). *The Movements of the Squares and the Resurgence of Popular Identity*. Draft Version. [online]. Available at: [http://www.tweetsandthestreets.org/wp-content/uploads/2014/01/resurgence\\_of\\_popular\\_identity\\_Jan\\_2014.pdf](http://www.tweetsandthestreets.org/wp-content/uploads/2014/01/resurgence_of_popular_identity_Jan_2014.pdf)
- Goodwin, J., Jasper, J.M. and Polletta, F. (2001). Introduction: Why Emotions Matter. In: Goodwin, J., Jasper, J. M. and Polletta, F. [eds]. *Passionate Politics: Emotions and Social Movements*. London: The University of Chicago Press.
- Gould, D. B. (2004). Passionate Political Processes: Bringing Emotions back into the Study of Social Movements. In: Goodwin J., and Jasper, J.M. [eds.] (2004). *Rethinking Social Movements: Structure, Meaning and Emotion*. Oxford: Rowman & Littlefield.
- Habermas, J. (1990). *Moral Consciousness and Communicative Action*. Cambridge: Polity.
- Hardt, M. and Negri, A. (2004). *Multitude: War and Democracy in the Age of Empire*. New York: The Penguin Press.
- Hardt, M and Negri, A. (2012). *Declaration*. Argo-Navis.
- Holloway, J. (2010). *Change the World without Taking Power*. New Edition. London: Pluto Press.
- Jones, O. (2008). Stepping from the Wreckage: Geography, Pragmatism and Anti-Representational Theory. *Geoforum*. (39). pp.1600-1612
- May, T. (2005). *Gilles Deleuze: An Introduction*. Cambridge University Press.
- McDonald, K., (2006). *Global Movements: Action and Culture*. Oxford: Blackwell.



- Mouffe, C. (2005). *On the Political*. London : Routledge.
- Newman, S. (2001). *From Bakunin to Lacan: Anti-Authoritarianism and the Dislocation of Power*. Oxford. Lexington Books.
- Newman, S. (2007). *Unstable Universalities: Poststructuralism and Radical Politics*. Manchester University Press.
- Patton, P. (2009). Deleuze's Practical Philosophy. In: Boundas, C.V. [ed]. (2009). *Gilles Deleuze: The Intensive Reduction*. London: Continuum.
- Rawls, J. (1999). *A Theory of Justice*. Revised Edition. Harvard University Press.
- Tamura, A. (2014). Narrating Life and Hope: Social Struggles in Japanese Post-Modernity and the Impact of the Fukushima Nuclear Disaster. *Journal of Philosophy of Life*. 4 (1). pp.1-27.
- Vaneigem, R. (1983). *The Revolution of Everyday Life*. Left Bank Books and Rebel Press.
- Williams, J. (2013). *Gilles Deleuze's Difference and Repetition: A Critical Introduction and Guide*. 2nd ed. Edinburgh University Press.
- 赤木智弘 (2007). 「『丸山眞男』をひっぱたきたい：31歳フリーター。希望は、戦争」『論座』1月号。
- 赤木智弘 (2012). 「コールを打つのは楽しいけれど」『Blogos』2012年7月7日。 <http://blogos.com/article/42621/>
- 池田信夫 (2012). 「愚者の行進」『アゴラ』2012年6月30日。 <http://agora-web.jp/archives/1468860.html>
- 植松青児 (2012) 「二本柱の運動が求められている」『ピープルズ・プラン』(59), pp.121-125.
- 大澤真幸 (2008). 『不可能性の時代』岩波書店。
- 小熊英二 [編著] (2013). 『原発を止める人々：3.11から官邸前まで』文藝春秋。
- 開沼博 (2012). 『フクシマの正義：「日本の変わらなさ」との闘い』幻冬舎。
- 五野井郁夫 (2012). 『「デモ」とは何か：変貌する直接民主主義』NHK出版
- 鈴木一人 (2012). 「官邸前原発再稼働反対デモに感じた違和感」『Blogos』7月2日。 <http://blogos.com/article/42306/?axis=b:12603>
- 野間易通 (2012). 『金曜官邸前抗議：デモの声が政治を変える』河出書房新社。
- 古市憲寿 (2011). 『絶望の国の幸福な若者たち』講談社。
- 辺見庸 (2012). 『瓦礫の中から言葉を：わたしの〈死者〉へ』NHK出版。
- 宮台真司 (1998). 『終わりなき日常を生きる：オウム完全克服マニュアル』筑摩書房。

